

第三章 空蟬の物語

[第一段 天気晴れる]

からうして(辛うじて、ようやく)今日は日のけしきも直れり(今日は天気が晴れた)。かくのみ(こうして宮中で)籠もりさぶらひたまふも(籠もり暮らして妻の家たる左大臣家に無沙汰していると、源氏の君は気兼ねを覚えて)、大殿の御心(おおとののおんこころ、養父の機嫌を)いとほしければ(伺おうとして)、まかでたまへり(妻の家に出かけられた)。

おほかたの気色(けしき、全体の様子)、人のけはひも(姫君の印象も)、けざやかに(明らかに)気高く(けだかく、上品で)、乱れたるところまじらず(綻び一つ無く)、なほ、これこそは(この姫こそは)、かの(それこそ)、人びとの(昨夜の品評で)捨てがたく取り出でし(捨て難いと取り上げられていた)まめ人(堅実な人)には(であるには)頼まれぬべけれ(間違いない)、と思すものから(と思しながらも源氏には姫の)、あまり(度過ぎた)うるはしき(端正さの)御ありさまの(御姿が)、とけがたく(余所余所しく)恥づかしげに(身構えて)思ひしづまり(気詰まりに)たまへるを(されているのを)さうざうしくて(物足りなく感じて)、中納言の君(ちゅうなごんのきみ)、中務(なかつかさ)などやうの、おしなべたらぬ(源氏お気に入りの)若人(わかうど、若い側仕え女房)どもに、戯れ言(たはぶれごと、軽口)などのたまひつつ(仰りながら)、暑さに乱れたまへる(薄着で肌けた)御ありさまを(御姿を)、見るかひあり(取り囲む女房どもは、典雅で素晴らしい)と思ひ(とあって)きこえたり(居たそう御座います)。

大臣(おとど、養父の左大臣)も渡りたまひて(も源氏の御部屋にお見えになったが)、うちとけたまへれば(君が寛いで居らしたので、大臣は)、御几帳(みきちやう、仕切り布を)隔てて御座し(おはし、座られ)まして、御物語聞こえたまふを(お話なさいましたのを)、「暑きに(暑いのに)」と苦み給へば(にがみたまへば、君が苦々しく仰ると)、人びと笑ふ(取巻きが笑う)。「あなかま(ああ、やかましい)」とて(と源氏はそれを制して)、脇息(けふそく、肘掛)に寄りおはす(寄り掛かれた)。いと(何と)やすらかなる(ゆるやかな)御振る舞ひなりや(為され様であろうか)。

暗くなるほどに(やがて日暮れると、女房の内から)、

「今宵、中神(なかがみ、不吉方角を塞ぐ神)、*内裏よりは(御所から見て此方は)塞がりて(凶角に)はべりけり(当たっております)」と聞こゆ(と誰かが言い出した)。*今日、御所から此方へ出向いて其のまま此処で休むのは縁起が悪い、ということになる。

「さかし(そうだったか)、例は(れいは、吉凶では)忌みたまふ(避けるべき)方なりけり(方角だったか)。二条の院(にじょうのいん、故大納言邸跡地に今上帝に建てて貰った源氏の君の御殿)にも(に行っても)同じ筋にて(同じ方角なので)、いづくにか違へむ(何処に方違えしたのか)。いと悩ましきに(面倒な)」とて大殿籠もれり(源氏はそう云って寝室に入ってしまった)。

「いと(とても)悪しきことなり(よくないことです)」と、これかれ聞こゆ(女房たちは口々に不安を募らせて、心当たりを探した。すると、)。

「紀伊守(きのかみ、国司)にて(という官職の方で)親しく(当家に親しく)仕うまつる人の(仕えている人の)、中川(なかがわ、廬山寺方面)のわたりなる(の近くにある)家なむ(家というのが)、このころ水せき入れて(近頃は庭の池に川の水を堰き入れて)、涼しき蔭にはべる(涼しそうで御座います)」と聞こゆ(と言う者がいた)。

「いとよかなり(それは良さそうだ)。悩ましきに(疲れたので)、牛ながら(牛車のまま)引き入れつべからむ所を(入って行ける所を)」とのたまふ(と源氏はお答えになった)。

忍び忍びの(忍び通いする)御方違へ所は(方角違いの宛てなら)、あまた(数多く)ありぬべけれど(あるのだろうけれど)、久しくほど経て(久しぶりに)渡りたまへるに(おいでになったと思つたら)、方塞げて(かたふたげて、吉凶の方角で)、ひき違へ他ざまへと思さむは(まさか余所へお泊りとは)、いとほしきなるべし(さすがに女君がお気の毒で御座います)。

しかし大義名分を振り翳す源氏は女君を後目に、紀伊守に仰せ言賜へば(紀伊守を呼び出し御用を御申しつけなされたので)、承りながら(紀伊守は承って)、退きて(しぞきて、退いた後に)、

「伊予守(いよのかみ)の朝臣(あそん、役人への敬称で此处では父親を言う)の家に慎むこと(不幸が)はべりて(在って)、女房なむ(女房どもが)まかり移れるころにて(当家に寄って来ていて)、狭き所に(せばきところに、今は家が狭苦しく)はべれば(なっている)、無礼気なる事(なめげなること、失礼にあたる事)やはべらむ(が在りはせぬかと心配です)」

と、下に嘆くを(陰で零していたのを)聞きたまひて(耳にされた源氏は)、

「その人近からむ(ひとちかからむ、女房たちが側に居るといふ所)なむ(こそ)、うれしかるべき(うれしいものです)。女遠き(おんなどおき、女気の無い)旅寝(たびね、借寝)は、もの恐ろしき心地すべきを(気味悪いものだから)。ただ(もう)その几帳の(その女房たちの寝屋の)うしろに(ほんの後隣に寝かせてもらえば十分だから)」とのたまへば(と仰られたので、其れを伝え聞いた紀伊守はまた)、

「げに(では、仰せのように用意いたしますが)、よろしき御座所(おましどころ)にも(何とか間に合えば幸いです)」とて、人走らせやる(家に使いを走らせて準備させる)。いと(ごく)忍びて(静かに)、ことさらに(殊更に)ことことしからぬ(事々しくしない)所をと(儘でと)、急ぎ出でたまへば(急いでお出掛けになったので)、大臣にも聞こえたまはず(大臣に挨拶もされず)、御供にも睦ましき限りしておはしましぬ(供も親しい数人だけという次第で御座いました)。

[第二段 紀伊守邸への方違へ]

「にはかに(また急な)」とわぶれど(と紀伊守邸では当惑したが)、人も聞き入れず(源氏一行はお構いなしの態)。*寝殿の東面(ひむかしおもて、の一角を)払ひあけさせて(提供させて)、かりそめの御しつらひしたり(そこに仮寝所の用意を整えさせた)。水の心ばへなど(池の作りなど)、さる方に(それなりに)をかしくしなしたり(趣向が凝らされていた)。田舎家だつ(いなかやだつ、田舎家風に)柴垣して(柴垣で囲んで)、前栽(せんざい、前庭の花々)など心とめて植ゑたり(色取

り取りに植えられていた)。風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、蛍しげく飛びまがひて、をかしきほどなり(なかなかの風情だった)。*平安貴族の邸宅は寝殿造り様式だった。身分によって敷地面積が異なり、公卿以上が一町(120 m²)、五位以上で半町とされていた。紀伊守邸は半町だったのだろう。平安京の条坊制区画と中川から水を引き流し出すという記述から南北に長い半町と想像している。敷地中央に主屋正殿たる寝殿を配し、その南側に風水の庭を配する。寝殿は庭向きに、即ち南向きに建てられ、正面に庭へ下りる階キザハシを設け、主賓玄関としてある。其の階に面した南向外面を階隠間ハシガクシノマとって、儀礼上の主人席としたという。ただし普通の接客は居間近く的生活空間で行ったようだ。そして、その寝殿の背後とは北面や、左右とは東西に幾つかの別棟を配し、各棟を渡り廊下たる渡殿で繋いだ。また唐様式的设计の基本に「対タイ」という、左右対称を持って安定を得る概念があって、建物の配置も内部構造もおおよそ対を成す。主屋寝殿は主人の居間と寝所が家屋中央に主たる空間(例えば、2間×2間×東西)を占めて、母屋モヤと言われた。その母屋の周囲の空間を廂ヒサシの間といい、母屋と同じ一間単位の構造なので、幾つもの部屋に使えるほどの広さ(例えば、1間×4間×東西+1間×4間×南北)を有していた。此処までが閉鎖性のある室内であった。ただし土壁のような固定壁は母屋の一角に特に塗籠ヌリゴメとして設けられることがあっただけで、無い場合も多かったらしい。母屋と廂との境には長押ナゲシ上下梁が構造されていて、其処に溝があれば障子戸が使えた。しかし多くの仕切りは、可動式の屏風や几帳を臨機応変に用いて、生活に応じた間取りを作ったという。建物はさらにその外周に簀子スノコと言う濡れ縁を設けてあった。したがって、「寝殿の東面」とは建物の東側の母屋と廂と簀子の空間を云う。母屋は源氏一人、廂は近侍まで、簀子は一行全員、が使えたという事だろう。有り難い事に、とはいえ錯誤の助長に注意はいるようだが、絵巻等が残っているので、ある程度は当時の様子が窺えるし、京都の風俗博物館には復元模型の展示などもあるそうだ。

人びと(一行の従者たちは)、渡殿より出でたる(渡り廊下の下を流れて)泉にのぞきみて(泉に臨んで)、酒呑む。主人も(あるじも、家人ばかりか主人の紀伊守までも)肴求むと(さかなもとむと、馳走の用意に)、*こゆるぎのいそぎありくほど(忙しそうにしている時に)、君はのどやかに眺めたまひて(源氏はゆっくりと家の中を見渡して)、かの(前夜の座談で馬頭が)、中の品に取り出でて言ひし(中流女性と取沙汰していたものは)、この並ならむかしと思し出づ(この位の身分の家に居る女だろうかと思し出される)。*「こゆるぎのいそ(小余綾の磯)」は神奈川県大磯から国府津にかけての海岸で、「急ぎ」にかかる枕詞。さらに「こゆるぎ」を肩を揺らして立ち働く様子と重ねる。

ちようど今、この家に寄って来ているという伊予守の家の者が思ひ上がれる気色に(上流然とした方と)聞きおきたまへる(予て耳にしていた)女なれば(むすめなれば、女だというので)、ゆかしくて耳とどめたまへるに(源氏は気になって様子を伺っていたが)、この*西面(にしおもて、隣の西側の部屋)にぞ(にどうやら)人のけはひする(目当ての其の人が居るらしい)。衣の音なひ(きぬのおとない、衣擦れの音が)はらはらとして、若き声どもにくからず(娘たちの話し声も可愛く漏れ聞こえる)。さすがに忍びて(ただ来客の源氏一行に遠慮してか)、笑ひなどするけはひ(笑い声などには)、ことさらびたり(不自然さもあった)。*此れで舞台の基本配置が定まった。源氏一行は寝殿の東側、伊予守の女一行は寝殿の西側、に居る。建物の構造上、奥まれば奥まるほど両者の距離が近くなるので、一行の中で源氏一人だけが伊予守家の女房たちの様子を窺えた、という設定のようだ。こうして全体を引いて見ると出来レースの印象が強くなるので、此処の描写を源氏の近視にした工夫が窺える。ただ寝殿の生活感を知らない私は、全景を整理しないと事態が把握出来なかった。

*格子を上げたりけれど(当初は西面の蔀戸が明かり取りと通風で引き上げられて開け放されていたが)、守(かみ、紀伊守が)、「心なし(見つとも無い)」と憤りて(むつかりて、叱って)下しつれば(下ろさせてあったので)、火灯したる透影(すきかげ、明かり)、障子のかみ(上)より(襖の合わせ目から)漏りたるに、やをら寄りたまひて、「見ゆや(見るか)」と思せど、ひま(隙)もなければ、しばし聞きたまふに(話し声だけに聞き入ると)、この近き(襖隣の)母屋(もや、主居間)に集ひみたるなるべし(集まっているようで)、うちささめき(其のひそひそ話の)言ふことどもを(内容に)聞きたまへば(耳を澄ませば)、わが御上(おんうえ、源氏自身の噂)なるべし(であった)。
*一読した時は映画を見るように、建物の外側からカメラがどンドン中に入るようなスピードを感じて、そう理解したが、直後混乱した。格子の蔀戸は廂と簀子との境で窓と雨戸の兼用のような変わった印象がある。これを外から見ていたのだから源氏は東面の簀子に居たわけだ。前段で衣擦れの音を聞いたとあったので、源氏は母屋に居ると私は思い込んでいた。そうか、源氏は東面なら何処でも自由に往き来出来た。こそこそ動いて簀子にも出てみたりしていたわけだ。ところで、従者たちは東側の渡殿辺りに屯して南側の庭を見ながら酒を飲んで居る。尤も従者たちは東南辺りで興じてはいても、其処以外には勝手に動けないので、女たちは男たちの目を避けて西北寄りに居たはずだ。となると源氏が女たちの様子を窺ったのは、東北面の簀子だった事になる。格子が下ろされると、源氏は東北廂へ移ったが障子が閉まっていた見えないから、さらに東面母屋に移って「このちかきもや=西面母屋」に聞き耳を立てた、という事なのだろう。

「いと(また)いたう(ずいぶん)まめだちて(堅い事)。まだきに(早々に)、やむごとなき(ご立派な)よすが(伴侶を)定まりたまへるこそ(お決めに為ったなんて)、さうざうしかめれ(勿体無いような気がしてしまいます)」

「されど、さるべき隈(くま、隠し妻の家)には、よくこそ(うまいこと)、隠れ歩きたまふなれ(忍び歩いて御出でのようです)」

など言ふにも(などと言う女房たちの話にも)、思すことのみ(義母たる藤壺への恋慕の一念を)心にかかりたまへば(気掛かりなされて)、まづ胸つぶれて(先に不安を覚えて)、「かやうのついでにも(このような噂話で)、人の言ひ漏らさむを(隠し事の露見が)、聞きつけたらむ時(広まっては困る)」などおぼえたまふ(などと心配された)。

ことなることなければ(しかし此処での噂話には取り立てたことも無く)、*聞きさし(聞き掛けただけで)たまひつ(止めて仕舞われた)。話の中には源氏が以前作った式部卿宮(しきぶきやうのみや、式部省の長官たる式部卿は親王身分の内から任命される)の姫君に朝顔奉りたまひし歌などを、すこし頬歪めて(ほほゆがめて、中身を違えて)語るも聞こゆ(語っていたものもあった)。「くつろぎがましく(如何にも呑気に)、歌誦じがち(うたずじがち、他人の歌を茶化して歌う)にもあるかな(ようで)、なほ(やはり)見劣り(上流には見劣り)端無むかし(はしなむかし、してしまいうだ)」と思す(と思われた)。 *源氏は噂話をもっと聞きたかったに違いない。私でさえ其う思うくらいだ。しかし源氏は既に「まづ胸つぶれて」いたのである。それは藤壺への恋慕を他者に知られる恐れからではあっただろうが、この盗み聞き自体も他者に知られたくないわけだ。盗み聞きを見つけれられて、笑い飛ばして仕舞いたくない思惑があった。しばらく従者から離れていて、不在を心配されて探し回られても困る。だから噂話が詰まらないからではなくて、軽口程度だったので一安心して、母屋から従者近くの簀子側へと切り上げた、ということだろう。切り上げたいから軽蔑した、みたいな。

守出で来て(暫し寛いでいると紀伊守が東面に遣って来て)、灯籠掛け添へ(軒先の吊り燈籠を足して)、灯(ひ、部屋の燈台)明く掲げ(あくかかげ、芯出しで明るくする)などして、御くだものばかり参れり(ちょっとした摘み物などを差し入れて来た)。

「*帷帳(とぼりちやう、仕切り幕)も、いかにぞは。さる方の心もとなくては(其の手配が疎かでは)、めざましき(破格の)饗応(あるじ、持て成し)ならむ(でもないな)」とのたまへば(と源氏が軽口を言われると)、*「帷帳を用意して高貴な婿を迎える」という歌があって、其の歌詞に「女を侍らせて十分に持て成した」という件がある。「帷帳はどうした?」とは其の歌に託けて女を呼べと言う催促。ただし是は冗談なので、「其の俚言っては態とらしいが、本当に『めざましきあるじ』忝し」、という事で、全体としては丁重な持成しへの心ある感謝の弁となる。ただ、これが歳相応の挨拶とは思えないのだが。

「*何よけむとも(まだ女の好みを)、え(何も)うけたまはらず(伺って居りませんでしたので)」と(と紀伊守は応えて)、かしこまりてさぶらふ(恐縮の態で控える)。そして源氏が*端つ方の(はしつかた、母屋の縁側にあたる廂の)御座(おまし、用意された御座所)に、仮なるやうにて大殿籠もれば(涼みながら横になれば)、人びとも静まりぬ(付き人たちも寝支度に着いた)。*「何よけむ」は「何が良いのかは」という意味の堅い言い方だが、「何よけむ」という文句自体が源氏が先に引き合いに出した「婿を迎える」歌で、どんな御馳走がいのだろう、という件で使われている。そこで守が「何よけむともえ承らず」気が付きませんでと言って畏まる応答は、守が源氏の古歌に託けた冗談を理解してオチを付けたという言い回しになっている。つまり、是で源氏の礼辞に対する守の適切な返辞となっているという次第である。この落語めいた語り口で、場の和みが表現されているとは思いますが、些か作者の遊び心が出過ぎの感もある。尤も是は当時の宮廷人の常識の上での表現なのかもしれないが、少なくとも私には、此处まで注釈を引かないと理解できない分かり難さだ。ただ、そうだとすると、ここは言葉の綾に紛らわせた少々強引な語り口で今後の急展開との整合性を作者が図ったようにも思えてくる。と、更に此处まで考えて来ると寧ろ、雲上人にあっては実際にこういう場面があったかもしれないとさえ思えてくるから不思議なものだ。でも、それこそが私のような下の者にとっては、どうにもメロドラマめいた腑に落ちない印象を残してしまう。*「端つ方」という言葉を使う作為を感じる。「端」は此处では廂の間の事だから、一意は夏の熱い夜に母屋が寝苦しい、ということはあるだろう。しかし源氏は紀伊守に、寝る時は女房たちの側が良い、とわざわざ言っていて、それを紀伊守が承ってから左大臣家を出たのである。男たちの端で女の近く、ということは男たちがいる東南簀子から離れた廂でと言っているのだから、御座は東面北廂に用意されてある。そして自分も品定め座の端くれだ、ということか。

主人の(あるじの、当家の)子ども(子たちが)、をかしげにてあり(可愛い様子で近くに控えて居た)。童なる(わらはなる、わらはてんじやう童殿上という)、殿上のほどに(御所勤めの見習いを許された子も中に居て)御覧じ馴れたるもあり(源氏が見知っていた者も居た)。伊予介(いよのすけ、紀伊守の父親)の子(即ち紀伊守の兄弟)もあり。あまたある中に(大勢居る中に)、いと(とても)けはひ(様子が)あてはかにて(上品な)、十二、三ばかり(歳くらい)なるもあり。

「いづれかいつれ(どの子がどこの子?)」など問ひたまふに(などと源氏がお尋ねに為ると)、

「これは、*故衛門督(こえもんのかみ)の末の子にて、いと(督が大変)かなしく(可愛がって)しはべりけるを(いたものを)、幼きほどに後れはべりて(親に先立たれて)、姉なる人のよすがに(この子の姉が当家に縁あって)、かくてはべるなり(こうして此处に居ります)。才(ざい、漢文

の学問)なども付き侍りぬ可く(つきはべりぬべく、出来そうで)、けしうははべらぬを(特に見劣りもしないのを)、殿上(御所見習い)なども思ひたまへ(考えては)かけながら(いるものの)、さすがしうは(思うようには)え(あまり)交じらひ(お付き合いが)はべらざる(捗りませぬよう)で」と申す。 *内裏警備は大門番たる「衛門府(ゑもんぷ)」と内門番たる「兵衛府(ひやうゑふ)」と禁中の「近衛府(このゑふ)」とに所管が分かれていて、近侍の近衛府武官が一段身分が高かったが、げゑ外衛とはいえ長官の督ともなれば殿上人の高級官僚であり、この衛門督は中納言だったらしい。

「あはれのことや(気の毒な)。この姉君や(其の姉君とは)、まうと(真人、相手への丁寧な呼び掛け、貴方、其方)の後の親(のちのおや、父親の後妻たる継母ですか?)」

と源氏が問えば、「さなむはべる(そうでございます)」と申すに(と守が申し上げると)、

「似げなき親をも(歳に合わない若い継母を)、儲けたり(まうけたり、持った)けるかな(ものですね)。主上にも聞こし召しおきて(上も其の姫君の事は御耳にされていて)、『宮仕へに出だし立てむと漏らし奏せし(衛門督が娘の後宮入りを考えていた様だが)、いかになりにけむ(どうなったのだろう)』と、いつぞやのたまはせし(いつだったか仰って御出ででした)。世こそ定めなきものなれ(人生とは分からないものですね)」と(と源氏は)、いと(ずいぶん)およすけ(大人びて)のたまふ(宣給う)。

「不意に(思いがけずに)、かくて(この様な事に)ものし(成っている)のはべるなり(ございます)。世の中といふもの、さのみこそ(ただそのようなもので)、今も昔も、定まりたること侍らぬ(はべらぬ、ございません)。中についても(特に)、女の宿世(すくせ、運命)は浮かびたるなむ(浮いて漂い)、あはれにはべる(頼り無いものです)」など聞こえさす(と守は申し上げる)。

「伊予介は、かしづくや(其の女御を大事にしているのか)。君と(きみと、衛門督なる殿上人の娘なれば姫君と)思ふらむな(思っているのだろうな)」と源氏が宣う。

「いかがは(どうでしょうか)。私の主(わたくしのしゅう、自分なりに奉仕しよう)とこそは(とくらは)思ひてはべるめるを(思っているのでしょうか)、好き好きしきことと(色事第一だろうと)、なにがしよりはじめて(私を初め家の者たちは)、承け引き(うけひき、賛同)はべらずなむ(致し兼ねて居ります)」と申す(と守が申す)。

「さりとも(とはいえ)、まうとたちの(其方たちのように)つきづきしく(近しくて、煽てた言い回し)今めきたらむに(年若い者に、煽てた言い回し)、おろしたてむやは(伊予介は姫を譲るだろうか)。かの介は、いと(なかなか)よし(風雅の心得)ありて気色ばめる(いい男ぶり)をや(だからな)」など、物語したまひて(君は御話に為って)、

「いづかたにぞ(姫は今どうして居られる?)」とお尋ねになり

「皆(女子供は皆)、下屋(しもや、別棟の寝所)におろしはべりぬるを(下がらせましたが)、え(ただ)や(まだ)まかりおり(全員が下がり切っては)あへざる(居りますまい、です)ので女君はまだ寝入っては居りますまい」と聞こゆ(と守は応えた)。

そうする内に従者たちは其々の酔ひ進みて(急ひすすみて、酔いが進んで)、皆人びと簀子に(すのこ、暑いので板の間に)臥しつつ(横になって)、静まりぬ(寝てしまった)。

[第三段 空蟬の寝所に忍び込む]

君は(従者も寝たので君は*廂に用意された寝所で横になったが)、とけても(解けても、落ち着いては)寝られたまはず(御休みになれず)、徒ら臥し(いたづらぶし、むなしい一人寝)と思さるるに(と思われては)御目覚めて、*この北の障子の彼方に(あなたに、向こう側に)人のけはひするを、「こなたや(此処かな)、かくいふ人の(例の姫君の)隠れたる方ならむ(潜んでいる所は)、あはれや(可哀相な)」と御心とどめて、やをら(そっと)起きて立ち(起き上がって)聞きたまへば(障子に聞き耳立てられれば)、ありつる(先程の)子の声にて、*御座は東面北廂。*「この北の障子のあなた」ということで、やっと東面北廂が明示された。いや、少しおかしい。「北の障子」は母屋と北廂との襖に違いないが、「この」は対象に正面しているわけで、東面北廂から見て「北の障子の彼方」は東面母屋になってしまう。女君が居るのは西面母屋なのだから、既に源氏は西面北廂にいるのか。御座が東面北廂なのは「端つ方=廂の間」という言い方で明示されている。だから「御目覚め」に為った東北廂から、「この北の障子」の前の西北廂まで、「て」の一言で移動したわけだ。それも、まだ「起きて立ち」ていないのだから、文字通りの夜這いである。何という早業、なのではなくて、何と言う省略か、である。ま、誰も居ない暗がりの北廂を手探りで、在っても几帳くらいを避けながら、四つん這いで源氏らしからぬ怪し気な態で動く描写に然程熱も入らないのかもしれないが、東側から西側へ跨ぐという心理的禁忌を犯すのは相当に緊迫感ある場面だと思うが。語りは是を敢えて遣り過ぎて、更なる緊張へと無言で引っ張ろうとする演出なのだろうか。とにかく源氏は今、西面北廂に居る。

「ものけたまはる(物承る、お尋ねしますが)。いづくにおはしますぞ(何処に居られますか)」と、かれたる声の(かすれ声で)をかしきにて言へば(可愛らしく聞けば)、

「ここにぞ臥したる(此処に寝ています)。客人(まらうど、御客様)は寝たまひぬるか(は御休みに為られましたか)。いかに近からむと思ひつるを(此処では近過ぎないかと案じました)、されど(が)、け遠かりけり(少し遠かったようですね)」

と言ふ(と応える声がする)。寝たりける声の(寝ぼけ声で)しどけなき(気安く)、いと(とても)よく似通ひたれば(良く似た声同士だったので)、いもうとと(応えたのは彼の子の姉の姫君だと)聞きたまひつ(君は御分かりに為った)。

「廂(ひさし、君は庇の間)にぞ大殿籠もりぬる(御休みに為られました)。音に聞きつる(噂通りの)御ありさまを(御姿を)見たてまつりつる(拝見して)、げにこそ(まことに)めでたかりけれ(ご立派でした)」と(と弟は)、みそかに(密かに)言ふ。

「昼ならましかば(昼なら)、覗きて見たてまつりてまし(覗き見させても頂きましたが)」

とねぶたげに言ひて(と姉は眠そうに言って)、顔ひき入れつる声す(顔を布団に潜らせた様子だ)。「ねたう(妬う、何だよ)、心とどめて(熱心に)も(もっと)問ひ聞けかし(聞き出せばいいのに)」とあぢきなく思す(と源氏は不満に思われた)。

「まろは端に寝はべらむ(わたしは此処の廂に寝ます)。あなくるし(ああ苦し)」

とて(と言って弟は)、灯かかげ(燈台の芯出し)などすべし(などしているようだ)。女君は、ただ(すぐ)この障子口(しゃうじぐち、障子を開けた)*筋交ひたるほど(すぢがいたるほど、斜め向かい辺り)にぞ(くらいに)臥したるべき(寝添辺っているのだらう)。*此処まで姉と弟の声の方角の描写が無くて漠然としていたが、此处で「筋交ひたる」と明示された。西面北廂から南を向いて母屋の様子を窺っている源氏から見て斜めという事は、女君は右手側に居る。左手は東面だから、声は奥の南側か右手の西側の何れかだったが、二人は西側に居たわけだ。また密談するほど二人の距離は近いのだらうが、弟は「端に寝侍らむ」と言って、母屋の外の西廂で寝ている。弟は灯をかかげてから寝たので西廂は少し明るそうだが、母屋との隔ては几帳らうか。話をしていたのだから襖では無い、いや少なくとも戸を閉めてはいない。

「中将の君(という名の側仕え女房)はいづくにぞ(何処ですか)。人げ遠き心地して(誰も居ないようで)、もの恐ろし(心細い)」

と言ふなれば(と女君が言うと)、*長押(なげし、敷居)の下(しも、母屋向こうの廂の間の低い辺り)に、人びと臥して(女房が寝たまま)答へすなり(いらへすなり、応えた)。「下に(下屋に)湯におりて(湯浴みに行きましたが)。『ただ今参らむ(直ぐ伺います)』とはべる(との事です)」と言ふ。*答えた女房は南西廂か南西西廂で横に為っているのだらう。「長押の下」という言い方からは向こうの低い場所を感じる。この女房の答えて「中将の君」が女君の付き人女房の事だと分かる。源氏は正真正銘の「中将の君」なので、女君の「中将の君は何処？」という台詞はズルいけど劇的だ。「人びと臥して」の印象からの推測だが、答えた女房は即答ではなく、下女に中将の様子を確かめさせてから女君に報告したように感じる。夜更けなので仰々しくなく、しかし失礼なく答える様子を想像すると其うなる。ただ母屋に畳が置かれていても、特に廂が一段下がっていたというべきかどうかは分からない。そして、襖戸は閉められていない。せいぜい几帳くらいなのだらう。夏だから当然だが、北廂の襖だけは閉められている。

皆静まりたるけはひなれば(皆が寝静まったのを見計らって)、掛金を試みに引きあげたまへれば(源氏が試しに掛金を引き上げてみられると)、あなたよりは(向こう側からは)*鎖さざりけり(鍵が掛けられていなかった)。几帳を障子口には立てて(母屋の障子を開くと几帳が如何にも隔て然として立ててあって)、灯はほの暗きに(中は仄暗く)、見たまへば(先を見れば)唐櫃(からびつ、道具箱)だつ(などの)物どもを(物々を)置きたれば(置いてあって)、乱りがはしき中を(雑然とした中を)分け入りたまひて(源氏は分け進んで)、けはひしつるところに(気配在る所に)入りたまへれば(近づくと)、ただ一人(女君が一人きりで)いと(とても)さきやかにて(小ぢんまりと)臥したり(横に為っていた)。なまわづらはしけれど(女君は人の気配は感じていたが)、上なる衣押しやるまで(源氏が顔を覆った衣を払うまで)、求めつる人と思へり(呼んであった付き人と思っていた)。*「鎖さざりけり」について、注釈に「過去の助動詞「けり」詠嘆の意。その意外さに驚く」とあって、源氏が驚いたような書き方で鍵に注目させようとする作者の意図というものは、確かに感じられる。しかし私が、無知なだけかもしれないが、驚いたのは、襖に掛金が在った事自体の方だった。単純に、そういう作りに成っていたのか、と唐突感を持ったのだ。いや建築物に対する意外性ではなく、斯かる物性を持ち出した作者の語り口について、少しあざとさを感じた。私がヒネクレテ居るのかもしれないが、私が撮るなら、北廂の暗がり東面から西面への見えざる境を超えた時の源氏の顔を大写しにして、其れこそ後は省いて行き成り濡れ場へパンする。と言っ

てしまいたいほど、この「紀伊守邸への方違え」は、筋立ても然る事ながら、脚色が物凄く、ほぼ脚本なだけに、この端書の多さも我ながら呆れる。こんな記述が今後も続くと、『源氏物語』の読破は危ぶまれる。

「中将召しつればなむ(中将に御用との事で、この近衛中将なる私が参上いたしました)。人知れぬ思ひの(人知れずお慕い申した我が心が)、しるしある心地して(貴女に通じた証拠かと思ひまして、幸いに存知ます)」

とのたまふを(と宣う源氏の浮世台詞を)、ともかくも思ひ分かれず(女君は何の事やら訳も分からず)、物に(魔物にでも)襲はるる心地して(襲われる様に感じて)、「や」とおびゆれど(と脅えたが)、顔に衣のさはりて(口を衣の袖が塞いで)、音にも立てず(声に成らない)。

「うちつけに(気紛れの)、深からぬ心の(遊び心の)ほどと(ように)見たまふらむ(見えてしまうのも)、ことわりなれど(尤もですが)、年ごろ思ひわたる(ずっと貴女をお慕い申してきた)心のうちも(我が心の内こそを)、聞こえ知らせむとてなむ(知って頂きたく告白いたしに参りました)。かかるをりを待ち出でたるも(この様な時を待って居りましたのも)、さらに(思いだけでなく)浅くはあらじと(前世の縁も浅からずと)、思ひなしたまへ(お思い下さりますよう)」

と(と源氏は)、いと(ととても)やはらかに(優しい声で)のたまひて(宣いて)、鬼神も(おにがみも、鬼神でさえも)荒だつまじき(手懐けようと言う)けはひなれば(物腰なので、女君も)、はしたなく(事立てて)、「ここに、人」とも、え(先ず)ののしらず(騒がなかった)。心地はた(しかし)気持ちは、わびしく(困惑して)、あるまじきことと思へば(罪深くも思い)、あさましく(呆れて)、

「人違へにこそはべるめれ(人違いで御座いましょう)」と言ふも(と言ったが)息の下なり(いきのしたなり、息の下でやっと呟くほどだった)。消えまどへる気色(その消え入りそうな弱々しさが)、いと(ととても)心苦しく(いたわしく)らうたげ(可憐)なれば(なので源氏は女君を)、をかしと(愛しく)見たまひて(お思いになって)、

「違ふべくもあらぬ(間違うはずのない)心のしるべを(恋の道筋を)、思はずにも(心無くも)おぼめ(御疑い)いたまふ(為される)かな(のですか)。好きがましきさま(色事仕舞い)には(などには)、よに(よもや)見えたてまつらじ(するものではありません)。思ふことすこし(思いの丈を少し)聞こゆべきぞ(申し上げたいのです)」

とて(と言って)、いと(女君がとても)小さやかなれば(小柄だったので)、かき抱きて(抱きかかえて)*障子のもと(自分の閨に戻ろうと障子の手前に)出でたまふにぞ(出た所で)、求めつる(女君が呼んでいた)*中将だつ人(中将なる付き人が)来あひたる(来合わせた)。*この「障子」は母屋の東西を仕切る襖に違いない。此の襖こそが、絶対禁忌の戒めであった。其の恐れ多さに源氏は、直接是を破ることが出来ずに、廂を遠回りした。しかし今や、既に戒めを犯した源氏は廂を通る意味が無い。いや、それどころか今は、暗がりやを遠回りする余裕などない。*この「中将だつ人」が湯浴みに出た時に障子の掛金を外した、と言う野村竜夫氏(<http://genji-id.hp.infoseek.co.jp/index.htm>)の指摘は尤もだと思います。また、紀伊守邸の舞台配置についても氏の解説は詳しく、大いに参考になります。この方のWebサイトにある解説は此処の件に限らず興味深く、いずれ改めて見る事になると思いますが、今は取込み中に付き詳しくは触れません。それで、その中将の君についてだが、彼女は北廂から母屋に入ろうとした時に、襖が開いている事に先ず驚いたに違いない。なぜなら自分

が閉めた筈だからだ。ただ、中将が母屋から出たのかどうかは定かでは無い。夕暮れに女房たちが母屋に集まって源氏の噂話をしていた事は語られていたが、寝る時に女房たちは廂へ出ただろうし、女君と一緒に母屋に居たのなら黙って湯浴みに行くとも思えない。ただ、いずれにしても下屋に向かう時に北廂の人少なさが気に為ったのだろう。梅雨明けの暑さは狂気を誘う。中将は源氏が母屋で寝ているものとは思っただろうが、魔が差す恐れを覚えて念の為に北の障子を締めて置いた。それだけに中将は開いた襖に禁断を察し、其の彼女の緊張感に源氏は気付いた、というところだろう。これは文を読んだ素直な印象だが、それでも我ながら幾らかヒネクレタ見方をしているようにも思える。私は「中将の君」を求めた女君の言葉に源氏が〈因縁〉に誘われたように感じた事も、襖の内鍵が鎖されていなかった事に唆されたらしいのも、作者の演出で意図だと認めつつも、其れに乗り切れて居ない。其の点では素直ではないだろう。それでも私が得た印象は正直な感想ではあり、且つ正当性もあると思っている。というのは、此処まで込み入った描写をするには、作者は幾つかの事件や経験や噂を下敷きに行っているに違いなく、意識的に複合性を持たせたまま話を進めている、と思うからである。確かに視点のない客観報道など有り得ないから、自分の思い以上のものは書けない、とも言えるが、同時に読み手の錯誤まで許容できれば、結果として意図以上のものは書けるので、努めて多くの事柄を書き込んだ、のだと思う。其の限りで私の見方は成立する。

「やや」と宣ふ(のたまふ源氏の声)に(に付き人は)、あやしくて(怪しんで)探り寄りたるにぞ(探り寄って来てみれば)、いみじく(はたと源氏の衣の香薫る)匂ひみちて、顔にも(顔にまで)くゆりかかる(煙りかかる)心地するに(ように感じて)、思ひ寄りぬ(その貴人の其処に在るを思い知った)。あさましう(付き人は驚いて)、こはいかなることぞと(一体何事かと)思ひまどはるれど(当惑したが)、聞こえむ方なし(貴人を問い詰めようも無い)。並々の人ならばこそ(普通の男なら)、荒らかに引きかなぐらめ(手荒に女君を連れ去るのかもしれないが)、それだに人のあまた知らむは(それでは事が露見して)、いかがあらむ(女君の立場は無くなる)。心も騒ぎて(女君は気が気で無しに)、慕ひ来たれど(縋る思いだったが)、動もなくて(源氏はこの付き人との出くわしに動じることも無く平然と)、*奥なる御座(東面母屋の寝所)に入りたまひぬ(女君を連れてお入りに為られた)。*源氏は意を決しているのだから、邪魔の入らない母屋へ向かう。「奥」は母屋の明示。夏の暑さなど源氏の情熱の前には涼風だ。動線は、西母屋から東母屋。

障子をひきたてて(そして源氏は障子を閉めて)、「暁に(明朝)御迎へにものせよ(御迎えに来られよ)」とのたまへば(と付き人にお告げに為ったが)、女は(女君は)、この人の(この付き人が)思ふらむことさへ(どう思うのかと)、死ぬばかりわりなきに(死ぬほどに恥じ入り)、流るるまで汗になりて(汗びっしょりで)、いと(とても)悩ましげなる(困っている様子を)、いとほしけれど(源氏は愛しんで)、例の(いよいよ)、いづこより取う出たまふ言の葉にかあらむ(何処から取り出される言葉なのだろうか)、あはれ知らるばかり(真心熱くして)、情け情けしく(可愛い可愛い)のたまひ尽くすべかめれど(口洩らしづめで遂に事果てたが)、なほ(女君はそれでも)いと(まだ)あさましきに(落胆して)、

「現ともおぼえずこそ(これが本当の事とは信じられません)。数ならぬ身ながらも(私は端下の身分の者ですが)、思し腐しける(おぼしくたしける、陵辱なされた)御心ばへのほども(心無い仕打ちを)、いかが(どうして)浅くは思う(些細な事と)たまへざらむ(済まされましようか)。いと(正に)かやうなる際は(今こそが)、際とこそはべなれ(金輪際と存じます)」

とて(と言って)、かく(このように)おし立ち(無理挿し)たまへるを(為されたのを)、深く情けなく憂し(嘆かわしい)と思ひ入りたるさまも、げに(確かに)いとほしく(痛々しく)、心恥づかしき(源氏も気が引ける)けはひなれば(程だったので)、

「その際々を(本気と遊びの違いなど)、まだ知らぬ(私にはまだ分かりません)、初事ぞや(こんな事は初めてです)。なかなか(どうやら)、押並べたる列に(おしなべたるつらに、私をただの色男と)思ひなしたまへる(御考えに為っている)なむ(ようで)うたてありける(残念です)。おのづから(何処かで)聞きたまふやうもあらむ(耳にされていませんか)。あながちなる好き心は(私が無闇な女遊びなどは)、さらに(けして)ならはぬを(慣らわぬを、致して居ないことを)。さるべきにや(何の因果か)、げに(実に貴女が私を)、かく(ここまで)淡められ(あはめられ、卑しいと)たてまつるも(御見做し為されるも)、ことわりなる(尤もなというべき)心まどひを(困惑を、与えたは)、みづからも(私自身)あやしきまでなむ(未熟でした)」

など、まめだちて(律儀に)よろづに(精一杯)のたまへど(お話に為るが)、いと(それが大変に)たぐひなき(勿体無い)御ありさまの(御姿で)、いよいよ(女君は益々)うちとけ(気安く)きこえむこと(申し上げることが)わびしければ(出来ない気になって)、すくよかに(たとえ堅苦しく)心づきなし(愛想が無い)とは見え(たてまつるとも(と思われようとも)、さる方の(むしろ其れで)言ふかひなきにて(何も言う甲斐のない女と)過ぐしてむと(遣り過ごさせようと)思ひて(考えて)、つれなく(素気無い振り)のみ(ばかり)もてなしたり(していた)。人柄の(人柄が)たをやぎたるに(物柔かい所に)、強き心を(強い思いを)しひて加へたれば(胸に秘めたれば)、なよ竹の心地して(しなやかな竹のように)、さすがに折るべくもあらず(さすがに折れそうに無い)。

まことに心やましくて(女君は心底から思い悩んで)、あながちなる御心ばへを(無理からの源氏の御気持ち)、言ふ方なしと思ひて(どうとも受け切れないままに)、泣くさまなど(泣く姿は)、いとあはれなり(本当に痛々しかった)。心苦しくはあれど(源氏は女君が気の毒だったが)、見ざらましかば(抱かず終いだったら)口惜しからまし(心残りだったろう)、と思す(とお思いになる)。慰めがたく(それでも女君が可哀想で)、憂しと思へれば(心が晴れないだろうと思われて)、

「など(なぜ)、かく(こうも)疎ましきものにしも(私を疎ましくばかり)思すべき(お思いなので)すか。おぼえなき(思いがけない)さまなる(事に成る)しもこそ(事こそ)、契りあるとは(宿縁なのだ)と思ひたまはめ(お思い下さい)。むげに(まるで)世を思ひ知らぬやうに(世間が分からないかのように)、溺れ給ふ(おぼほれたまふ、呆然とされる)なむ(のは)、いとつらき(悲しいばかりです)」と恨みられて(と恨み言を云うと)、

「いとかく憂き(これ程までに辛い)身のほどの定まらぬ(立場ではなく)、ありしなごらの(昔ながらの)身にて(一人身の立場で)、かかる御心ばへを(この様な御情けを)見ましかば(頂戴致しましたなら)、あるまじき(畏れ多い)我頼みにて(われだのみ、自負ながら)、見直したまふ(また会える)後瀬(のちせ、後の機会)をも(もあるかと)思ひたまへ(思っ頂く)慰めましを(希もありましようが)、いとかう仮なる(ただ此の時ばかりの)浮き寝のほどを(今の情交を)思ひはべるに(思いますと)、たぐひなく(及ばぬ事)と思ひたまへ(思われて)惑はるるなり(戸惑います)。よし(せめて)、今は見きとなかけそ(今は無かった事にして下さい)」

とて(と言って)、思へるさま(思いに沈む女君の姿は)、げにいと(全く以って)ことわりなり(尤もな事だった)。おろかならず(源氏は疎かならぬ気持ち)を)契り(約束して)慰めたまふこと(女君を慰められる事)多かるべし(多かっただろう)。

鶏も鳴きぬ(そして、鶏の声で夜が明けた)。人びと起き出でて、

「いと(いやあ)寝汚なかりける(いぎたなかりける、良く寝た)夜かな(晩だった)」

「御車ひき出でよ(御車の御用意をしろ)」など言ふなり。

守も出でて来て、「女などの御方違へこそ(忍び通いでもあるまいに)。夜深く(暗い内から)急がせたまふべきかは(帰りを急がなくても宜しいでしょうに)」など言ふもあり。

君は(源氏の君は)、また斯様の序で在らむ事も(かやうのついであらむことも)いと(先ず)かたく(難しく)、さしはへて(差し延へて、事改めて訪ねるなど)はいかでか(はどのようにも、出来よう筈も無く)、御文なども通はむことの(手紙を交す事も)いとわりなきを(無理かと)思すに(思えば)、いと胸いたし(本当に悩んだ)。*奥の中将も出でて(奥から付き人の中将が女君を迎えにくれば)、いと苦しければ(女君はまた恥じ入り)、許したまひても(逃げるように引き下がろうとするのを)、また引きとどめたまひつつ(源氏は重ねて引き止めて)、 *「奥」は母屋、西母屋。主人たる女君の留守に女房が母屋を使う事は無い、という指摘をする人も在るらしいが、この言葉は作者の明示である。解説が本文を曲げて如何なるものでもない。それに中将は元々女君の側仕えで日頃から添寝していたようだし、何より当夜は女君が心配で隣室から様子を窺っていたのである。

「いかでか、聞こゆべき(どう申し上げたら良いのでしょうか)。世に知らぬ(男女の仲に為ったとも思えない)御心のつらさも(貴女の辛い為さり様も)、あはれも(情けを)、浅からぬ(深めて縁を結んだ)世の思ひ出では(夜の思い出も)、さまざま(其々が)めづらかなるべき(常ならぬ)例かな(ためしかな、事ですから)」

とて(と言って)、うち泣きたまふ気色(嘆くばかりの其の御姿は)、いと(如何にも)なまめきたり(艶めいていた)。とりもしばしば鳴くに(が、やがて鶏が重ねて鳴き出せば)、心あわたたしくて(追い立てられるように気が急いで、こう詠まれた)、

「つれなきを恨みも果てぬ東雲(しののめ)に、とりあへぬまで驚かすらむ」 (和歌 2-10)

「素っ気無いにも程がある、興を切り裂くニワトリの声」 (意識 2-10)

*「東雲」は東の空が開ける頃、早朝。「とりあえぬまで」は「鳥が煩く鳴き合ったので」と「取り敢えぬまで=都合が悪いという事に」を重ねる。「おどろかすらむ」は「はっと目覚めさせられてしまう」。通せば、「冷たい仕打ちに恨みも晴れない朝だが、慌しさに今は是までと諦める」、だろうか。注釈には「源氏の贈歌。「しののめ」は東の空の明るむ時刻、歌語。「とりあへぬ」に「鶏」と「取りあへぬ」を掛ける。推量の助動詞「らむ」原因推量を表す。どうして--するのだろうか、の意。第一句「つれなきを」の詠嘆の間投助詞「を」、第二句「恨みも果てぬ」の「ぬ」(打消の助動詞、終止形)というように、いずれも句が切れるかなり強い恨み言と詠嘆を詠み込んだ歌である。》とあって、確かに「恨みも果てぬ」「とりあへぬ」の激しさに若さを感じる。

女、身のありさまを思ふに(女は自身を省みれば)、いと(まるで)つきなく(不相応に)まばゆき(眩し過ぎる)心地して(事に思えて)、めでたき御もてなしも(源氏の有難い思し召しも)、何ともおぼえず(受け止められず)、常は(普段は)いと(ひどく)すくすくしく(無骨で)心づきなしと(つまらない)思ひあなづる(侮っている)伊予の方の(良人の伊予介の姿が)思ひやられて(浮かんで来て)、「夢にや見ゆらむ(この過ちを伊予介が夢で知るのではないか)」と、そら恐ろしく謹まし(つつまし、気が引けた)。

「身の憂さを嘆くにあかで明くる夜は、とり重ねてぞ音もなかれける」 (和歌 2-11)

「泣き明かしても泣き足りぬ、明けの鳥との気張り合い」 (意識 2-11)

*注釈には≪女の返歌。係助詞「ぞ」は「詠嘆の助動詞「ける」連体形に係る、係り結びの法則。強調のニュアンスを添える。自発の助動詞「れ」連用形。源氏の「とりあへぬまで」の語句を受けて、「とりかさねてぞ」と返す。

「とりかさね」に「鶏」と「取り重ね」を掛ける。」と説明されている。鳥の朝鳴きが雄鶏なら、この意識では男の歌に成ってしまうのだろうが、いっそ伊予介の歌とでも言ってしまう。

ことと(すっかり)明くなれば(明るくなったので)、障子口まで送りたまふ(源氏は女君を障子口まで見送られた)。内も外も(うちもとも、寝殿の内外も)人騒がしければ(人が立ち働いていれば、人目もあるので早々に)、引き立てて(襖を引き閉めて)、別れたまふほど(別れられた時は)、心細く、隔つる関と見えたり(襖一つがまるで関所のようにも思われた)。

御直衣(おんなほし)など着たまひて(身支度を整えると)、南の高欄に(正面の高欄前の簀子まで出て)しばしうち眺めたまふ(しばらく庭を眺めていらした)。西面の格子そそき上げて(その源氏の御姿を西側南面の格子蔀を上げて)、人びと覗くべかめる(当家の人々が覗いているらしい)。簀子の中のほどに立てたる(縁側中央に立ててある)小障子の上より(衝立の上から)仄かに見えたまへる御ありさまを、身にしむばかり思へる(美男子に抱かれる夢を見て身体を疼かせる)好き心どもあめり(好色心も多く在ったことだろう)。

月は有明にて(月は西空に残り)、光をさまれる(収まれる、薄らぐ)ものから(ものの)、かげ(影)けざやかに(はっきりと)見えて、なかなか(何とも)をかしき(面白い)曙なり(朝だった)。何心なき(何ということも無い)空のけしきも、ただ見る人から、艶にもすごくも(美しくも悲しくも)見ゆるなりけり。人知れぬ(誰にも話せぬ)御心には(源氏の思いは)、いと胸いたく、言伝てやらむ(手紙を交す)よすが(手立て)だになきをと、かへりみがちにて(何度も後ろを振り返りながら)出でたまひぬ(帰途に着かれた)。

殿(との、二条院)に帰りたまひても(に帰り着かれても)、とみにも(すぐには)まどろまれたまはず(眠気を催うされなかった)。また(再び)あひ見るべき(会える)方なきを(方法が無くて)、まして、かの人の思ふらむ心の内、いかならむと、心苦しく思ひやりたまふ。「すぐれたることはなけれど(特別な所は無いが)、めやすく(感じの良さを)もてつけてもありつる(備えてもいる)中の品かな(中流の女というところか)。隈なく見集めたる(品定め座談で経験豊富な)人の言ひしことは、げに(実に含蓄がある)」と思し合はせられけり(と納得されていた)。

このほどは大殿にのみおはします(さて其の後暫く、このところ源氏は左大臣邸*ばかりにいらっしやいます)。なほ(あれから)いと(すっかり)かき絶えて(途絶えたきりで)、思ふらむことの(源氏は女君がどんな思いで居るかが)いとほしく御心にかかりて、苦しく思しわびて、紀伊守を召したり(御呼び寄せに為りました)。 *こういう文が、どうも苦手だ。差し当たっては場面転換で、源氏がそうしていた、という事だけを言っているようには見える。ただ、それなら「のみ」ではなく、「多く」ぐらいの方が流しやすい。「のみ」は強いので、御所でも二条院でもなく左大臣家ばかりに居る、と読める。とすると作者が、源氏の心境に注意を向けさせようとしているのかと感じる。ところが其れが、正妻や養親の機嫌を取ろうとしたのか、藤壺より紀伊守邸の女が気に為って主人顔をしたがったのか、どうやら後者の気分が強いように文は続くが、寧ろ其ういう事より、単に御所での御用が暇だったとか、二条院で思いに耽る事もなかったとか、全てを含んだ状態を言いたいようにも見えて、それらの焦点が把握し難くて、未消化感が残ってしまう。そして、この文が感覚的に良く納得出来てしまう人が居そうに感じる事が余計面白くない。

「かの、ありし中納言(とは、即ち故衛門督)の子(とは、即ち女君の弟)は、得させてむや(私に預けて貰えないだろうか)。らうたげに見えしを(可愛らしかったので)。身近く使ふ人にせむ(側に置いて最大限面倒を見たい)。主上にも我奉らむ(御所にも私が上らせよう)」とのたまへば(と源氏が話されると)、

「いと(とても)かしこき(畏れ多い)仰せ言にはべるなり(御言葉で御座います)。姉なる人に宣給ひみむ(のたまひみむ、知らせて遣りましょう)」

と申すも(と守が申せば)、胸つぶれて思せど(源氏は女君が引き合いに出されただけで胸が詰まったが、こうお尋ねに為った)、

「その姉君は、朝臣(あそん、其方)の弟や持たる(弟をお持ちか、とは即ち、良人の伊予介との間に子を儲けているのか)」

「さもはべらず(いえ、御座いません)。この二年(ふたとせ)ばかりぞ、かくて(父の妻として)ものし(暮らして)はべれど(居りますが)、親のおきて(後宮入り)に違へり(背いた)と思ひ嘆きて、心ゆかぬ(塞ぎがちの)やうになむ(ようだと)、聞きたまふる(聞いております)」

「あはれのことや(可哀想に)。よろしく聞こえし(美人と評判の)人ぞかし(人のようだが)。まことによしや(本当ですか)」とのたまへば(と源氏が宣えば)、

「けしうははべらざるべし(悪いということも無いでしょう)。もて離れて(敢えて距離を置いて)うとうとしくはべれば(余所余所しくして居りますれば)、世のたとひにて(継母と継子は仲が悪いという世の例え其の俎に)、睦びはべらず(親しくしても居りませんので、あまり良くは存じません)」と申す(と守は申す)。

[第四段 それから数日後]

さて、五六日ありて、この子率て(いて、率き連れて)参れり(紀伊守が左大臣邸の源氏の許に遣ってきた)。こまやかに(整然とした)をかし(顔つき)とはなけれど(ではないが)、なまめきた

る(風雅な)さまして(姿で)、あて人(貴人、良家の子弟)と見えたり。召し入れて(源氏は其の子を自室に招き入れて)、いと(大変)なつかしく(親しく)語らひたまふ(お話をされた)。童心地に(わらはここに、子供は無邪気に)、いと(とても)めでたく(晴れがましく)うれしと思ふ。

そして勿論、源氏は其の子にいもうとの君(姉君たる女君)のことも詳しく問ひたまふ。さるべきことは(其の子は分かることは)答へ聞こえなどして(お答え申し上げて、その後は)、恥づかしげに鎮まり(しづまり)たれば、うち出でにくし(源氏は肝心な話を切り出し難かった)。されど(それでも)、いと(何とか)よく(上手く)言ひ知らせたまふ(言い含める事が出来た)。

かかること(源氏と姉との間に何か内密な関わりがある)こそはと(ようだとは)、ほの心得るも(其の子は薄々理解したものの)、思ひの外なれど(意外な事でもあり)、幼な心地に(幼かったので)深くしも(深い事情までは)たどらず(分からなかった)。そんな子が女君の許に御文を持って来たれば、女、あさましきに(その意外な事に驚いて)涙も出で来ぬ。この子の(この弟の*小君が)思ふらむことも(どう思っているのかと思えば)はしたなくて(極まりが悪くて)、さすがに、御文を面隠しに広げたり。いと多くて(その手紙はとても長くて)、*「小君こぎみ」は源氏の君の御遣いを勤める者。源氏の代わりを果たす小者の「君」。故衛門督の子としての「小君」の威光は源氏の前には通じない。

「見し夢を逢ふ夜ありやと嘆くまに、目さへ合はでぞ頃も経にける (和歌 2-12)

「夢にまでみた逢える夜を、待ち侘びる内に夢ですら逢えず (意識 2-12)

*イヤラシイ歌なので、理屈っぽく読むと興ざめだが、確認しないと落ち着きも悪い。「見し夢を」は<見た夢が>と<抱き合った素晴らしい目に>。「逢ふ夜ありやと」は<叶う夜が在るのかどうか>と<また逢える夜が来るかと>。「嘆くまに」は<気掛かりで>と<思いながら>。「目さへ合はでぞ」は<眠れないまま>と<会えないままで>。「頃も経にける」は<時を過ごした>と<長い時間が経った>。

寝る夜(ぬるよ、夜も眠れ)なければ(ませぬので)」など、目も及ばぬ(眩しいほど美しい)御書きざまも(字で書かれた文面も)、霧り塞がりて(きりふたがりて、涙で曇って)、心得ぬ宿世(不本意な運命=既に人妻)うち添へりける(となってしまうている)身を思ひ続けて臥したまへり(身を悲嘆して臥してしまわれた)。

またの日(翌日)、小君召したれば(小君は源氏に呼ばれているので)、参るとて(殿に参るので)御返り乞ふ(姉に御文の返書を貰おうとした。すると姉君は)。

「かかる御文見るべき人もなし(あのような御手紙を見る人は居ない)、と聞こえよ(と源氏の君に申し上げなさい)」とのたまへば(と宣うので)、うち笑みて(小君は笑いながら)、

「違ふべくも(人違いと)のたまはざりし(言っ御受け取りに為らなかつた訳ではない)ものを。いかが(どうして)、さは(そのようなことが)申さむ(申せましようか)」

と言ふに(と言ったが)、心やましく(この小君の応対に姉君は気落ちして、源氏はきっと小君に彼の夜の過ちを)、残りなくのたまはせ、知らせてけると思ふに、つらきこと限りなし。

「いで(いえ)、およすけたる(大人びた)ことは言はぬぞよき(言わぬが良い)。さは(それならば)、な参りたまひそ(殿になど参るな)」とむつかられて(とお怒りになったが、小君は)、

「召すには(お呼びなのに)、いかでか(どうして、伺わないで済まされましようか)」とて(と言って)、参りぬ(源氏の許に参上した)。紀伊守(その際には紀伊守が)、好き心に(好色心で)この継母の有様(ありさま、父親の妻であること)を惜しきもの(あたらしきもの、勿体無いもの)に思ひて、追従し(ついしょうし、機嫌を取ろうとして)ありけば(いたので)、この子を(その弟の小君を)もてかしづきて(良く面倒見ている)、率てありく(連れて出向いた)。

君(源氏の君は早速に小君を)、召し寄せて、

「昨日待ち暮らししを(昨日待っていたのに、来なかったね)。なほ(どうも)あひ思ふまじき(おまえと私の思いの程が違っている)なめり(ようだね)」と、怨じたまへば(と恨み言を言われたので)、顔うち赤めてゐたり(小君は赤く恥じ入っていた)。

「いづら(返書は何処に)」とのたまふに(と源氏がお尋ねに為ると)、しかしかと申すに(小君は経緯を是々と申し上げたが、源氏は)、

「言ふかひなのことや(言う甲斐の無い事だな=話に為らないな)。あさまし(呆れた)」とて(と言って)、まとも賜へり(まとも小君に御文の御用を仰せ付けられた)。

「あこは知らじな(おまえは知るまいな)。その伊予の翁よりは、**私こそが**先に**姉君と**見し(目交った)人ぞ。されど、**姉君は私を**頼もしげなく頸細し(くびほそし、貧弱)とて、太束なる(ふつつかなる、太く丈夫で頼れる無骨な伊予介の如き)後見儲けて(まうけて、持って)、かく侮りたまふなめり(こうして私を侮辱なさっておられる)。さりとも(それでも)、あこはわが子にて(おまえは我が子で)をあれよ(居なされよ)。この頼もし人は(その姉君が頼る人は)、行く先短かりなむ(どうせ老い先短いだろうし)」

とのたまへば(と源氏が戯れなさると、小君は)、「さもやありけむ(そういうこともあったのか)、いみじかりけることかな(大変なことだな)」と思へる(とと思っている、その小君の様子を源氏は子供はこんな他愛ない嘘でも真に受けて)を、「をかし(かわいい)」と思す(と思う)。

この子を(源氏はこの子を)纏はし(まっはし、側に付き添わし)たまひて(為されて)、内裏にも率て参りなどしたまふ。わが御匣殿(みくしげどの、衣裳係り)に宣ひて(のたまひて、お命じに為ったし)、装束(さうぞく、小君の童殿上の服)なども為させ(せさせ、新調して遣り)、まことに親めきて(親らしく)扱ひ(あつかひ、養育)たまふ(為されていた)。

御文は常にあり(女君は源氏からの手紙を何通も送られていた)。されど、この子(遣いの弟である小君)もいと幼し(まだ小さいので返書を託しても)、心よりほかに(不用意に)散りもせば(落として事が露見すれば、今の自分は只でさえ不本意な境遇に居るものを処の上)、軽々しき(軽薄な)名さへ(浮名まで)とり添へむ(貼り付けられて)、身のおぼえを(我が身の世評が)いと(ひどく)つきなかるべく(実情と掛け離れてしまうと)思へば、めでたきことも(幸せも)わが身から(分

相応から)こそと思ひて、うちとけたる(気を許した)御答へ(おんいらへ、御返事)も聞こえず(も差し上げずに居た)。ほのかなりし(遠くに仰ぐ)御けはひありさまは(源氏の御姿は)、「げに(実に)、なべてにやは(並々ならぬ)」と、思ひ出で(思い出され)きこえぬには(ないわけなど)あらねど(ないけれど、それだけに其の並々ならぬ器量の貴人に自分の如き下の者が憧れて)、「をかしきさまを(恋の真似事を)見えたてまつりても(お応えしても)、何にかはなるべき(何になるというのか)」など、思ひ返すなりけり(省みていた)。

君は(しかし源氏の君のほうは)思しおこたる(女君を思わない)時の間もなく、心苦しくも恋しくも思し出づ(思い出していた)。思へりし気色(女君が過ちを思い悩む姿)などのいとほしさも(などの労しさも)、晴るけむ方なく(頭から払い除けようも無く)思しわたる(思い続ける)。軽々しく(遊び半分に)這ひ紛れ(誤魔化して)立ち寄りたまはむも(女通いするの)、人目繁からむ(しげからむ、多く)所に(誰が如何見るかもしれないので)、便なき(びんなき、頭の君の右大臣家のような無体な)振る舞ひや(脅しなどが)顛れむと(あらはれむと、在ったりすると)、人のためも(相手の女君が)いとほしく(可哀相だ)、と思しわづらふ(と考え倦ぐねた)。

例の(例によって源氏は、また左大臣邸を空けて)、内裏に日数(ひかず、何日か)経給ふ頃(へたまふころ、過ごしていた時)、さるべき方の(また紀伊守邸が御所の方違えに)忌み(当たる日、方違えは60日周期なので前回の約2ヵ月後)待ち(を待って)出でたまふ(出向かれた)。俄かに退出給ふ真似して(にはかにまかでたまふまねして、不意に帰宅する振りをして)、道のほど(左大臣邸に向かう道の途中)より(から折れて)おはしましたり(紀伊守邸に現れた)。

紀伊守おどろきて、*遣水の面目(やりみずのめんぼく、前回の接待を評価された光栄)とかしこまり喜ぶ(恐縮してお迎えする)。小君には、昼つ方より、「かくなむ(こういう計画を)思ひよれる(考えている)」とのたまひ契れり(と下話を付けていて)。明け暮れ(日頃から)纏はし(まつはし、側付けて)馴らし給ひければ(たまひければ、てもいたので)、今宵もまづ(真っ先に)召し出でたり(御召し出された)。*「遣り水」については語感から、其の言葉自体に<接待>の意味があるのだろうと思ひながら辞書を引いたら、「庭木の水遣り、または、寝殿造りの庭園で外から水を引き入れてつくった流れ(Yahoo辞書)」、となっていた。確かに、<貴人の接待>を<庭木の水遣り>に擬えるのは不見識だろう。此处は、前回の方違えが庭に水を引き込んだことから選ばれた事に対する荣誉ということらしい。それでもやはり紀伊守に、前回の方違え全体に<水を向けた甲斐があった>という気持ちはある、と解す。あの「方違え」での接待は、源氏の地位利用による無理強이었다のだから、紀伊守には初めから自身の出世や家の安泰を期して、源氏に取り入ろうとする思惑があった。だから<女君の件>についても紀伊守は、未必の故意以上で共謀未満、くらいの自負ないしは自覚を持っていた。良い大人なんだから当たり前だ。ただし、全ては趣の中で推移していくという含みのある語り口なので、語り手にも聞き手にも登場人物自身でさえも何が如何と断定し難い曖昧さを漂わせる。事の序でに少し言い過ぎれば、帝の御子たる源氏が曖昧さの中で悶々とするという語り口は、世の中とはそういうものだという作者周辺の主張に聞こえてくる。勿論、世の中が一人一人の思惑で動き、事の善悪は秩序付けが必要な時に後付される、という認識自体はごく有り触れている。問題は、其れを主張する事の意味、である。いや、少し広げ過ぎた。今は纏め切れない、其れも趣の中、として置こう。

女も、さる御消息(おんせうそこ、その旨の知らせは)ありけるに(受けていて)、思し謀り(たばかり、妻を欺く凶り事を巡らし)つらむ(ていたであろう)ほどは(源氏の思いの丈は)、浅くし

も思ひなされねど(浅いとは思われないが)、さりとして、うちとけ(気を許し)、人げなき(身の程知らずの)ありさまを(恋心を)見えたてまつりても(打ち明けても)、あぢきなく(尽き無く=先の無い)、夢のやうにて過ぎにし(歓びが儂く消えてしまう)嘆きを(悲しみを)、またや加へむ(更に増させてしまう)、と思ひ乱れて、なほ(続けて)さて(其のまま)待ちつけ(居間でお待ち受け)きこえさせむことの(申し上げることが)まばゆければ(気恥ずかしくなって)、小君が出でて(小君が源氏に呼ばれて)往ぬるほどに(出て行った際に)、

「いと(此処は御座にとても)け近ければ(近すぎるので)、かたはらいたし(気が引けます)。なやましければ(体が辛いので)、忍びて(少し)うち叩かせなど(肩腰の叩き揉みなど)せむに(して貰おうかしら)、ほど離れてを(何処か離れた部屋でも)」とて、渡殿(別棟に行く渡り廊下の一角に)に、中将といひしが(中将と言う女房が)局したる(つぼねしたる、使っている)隠れに(部屋が在って、女君は其処に)、移ろひぬ(移って行った)。

さる心して(源氏は計画通り)、人とかく静めて(従者を早く寝静まらせて)、御消息あれど(女君の様子を知ろうと小君を遣わせたが)、小君は尋ねあはず(小君は姉の居場所が分からなかった)。よろづの所求め歩きて(方々探した挙句に)、渡殿に分け入りて、辛うじて辿り来たり(からうしてたどりきたり)。いと(小君はさすがに姉の仕業を)あさましくつらし(身勝手に思い遣りが無い)、と思ひて、

「如何に甲斐なし(いかにかひなし、何と役立たずな)と思さむ(と吾を源氏の君がお思いになる)」と、泣きぬばかり言へば(泣き出しそうになって言えば)、

「かく(そのように)、けしからぬ(解し兼らぬ=聞き分けの無い)心ばへは(事を)、つかふものか(云うものではない)。幼き人の(子供が)かかること(このような色恋沙汰を)言ひ伝ふるは(取り次ぐのは)、いみじく(とても)忌むなる(いけない)ものを(ことだというのに)」と言ひおどして(と叱って)、「『心地悩ましければ(姉は体の具合が悪いので)、人びと避けず(夜でも女房を側に置いて)おさへさせてなむ(揉ませています)』と聞こえさせよ(と君には申し上げなさい)。あやしと誰も誰も見るらむ(早く行かないと誰もがおまえを怪しんで見るでしょうに)」

と言ひ放ちて(と言ってはみたが)、心の中には、「いと(本当は)、かく(このように)品定まりぬる(身分の定まった)身のおぼえならで(立場でなしに)、過ぎにし(亡くなった)親の御けはひ(父親の勢いが)とまれる(残っていた)ふるさとながら(実家に居たままで)、たまさかにも(時折に)待ちつけたてまつらば(お待ち受けもうしあげる様なら)、をかしうもやあらまし(どんなに楽しかったでしょう)。しひて(あえて)思ひ知らぬ(源氏のお気持ちが分からない)顔に(振りで見消つも(無視しているのも)、いかに(何と)ほど知らぬ(身の程知らずな)やうに(どのように)思すらむ(思われることだろう)」と、心ながらも、胸いたく、さすがに思ひ乱る。「とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に(むじんに、ひたすらに)心づきなくて(愛想尽かしで)止みなむ(押し通そう)」と思ひ果てたり(思いを決めたのです)。

君は、いかに(小君がどのように)たばかりなさむと(手筈を整えるかと)、まだ幼きを(その幼さを)うしろめたく(案じながら)待ち臥したまへるに、不用なるよしを(小君が不首尾なる旨を)

聞こゆれば(申し上げると)、あさましく(女君の驚くほどに)めづらかなりける(珍しい頑なさの)心のほどを(気持ちを知ると)、「身もいと恥づかしくこそなりぬれ(是では只の恥晒しだ)」と、いと(とても)いとほしき(気落ちした)御気色なり。とばかり(暫しは)ものも(何も)のたまはず(仰らず)、いたく(大きく)うめきて(溜息をついて)、憂しと思したり(情けなく思われた)。

「*帚木の 心を知らで園原の 道にあやなく 惑ひぬるかな (和歌 2-13)

「近づくほどに姿無く、帚木求めて然迷うばかり (意識 2-13)

*「帚木」は歌語。信濃国の園原の伏屋(ふせや、荒れ屋)に生えていたという箒を逆さにしたような恰好をした木で、遠くから見ると見えるが、側に近づくとう消えてしまうという伝説上の木。女君を喩える。

聞こえむ方こそなけれ(会えないのだから、言葉も無い)とのたまへり(と小君に言伝て、詠んだ歌を女君の許へ届けさせた)。女も、さすがに、まどろまざりければ(寝付けずに居たので)、

「数ならぬ伏屋に生ふる名の憂さに、あるにもあらず消ゆる帚木」 (和歌 2-14)

「見えた心算で尋ねてみても、在っても無くてもどうせ帚木」 (和歌 2-14)

と聞こえたり(とお返しした。ただ源氏は、)。小君(文遣いの小君が)、いと(いやに)いとほしさに(精出して)眠たくもあらで(眠気も忘れて)まどひ歩くを(行き来するのを)、人あやしと見るらむ(人が怪しんで見ないか)、とわびたまふ(と心配されていた)。

例の(例によって)、人びとは(供人たちは)いぎたなきに(寝込んでいたが)、一所は(ひとところ、源氏一人は)すずろに(取り留めなく)すさまじく(呆然と)思し続けられるれど(思い続けていらっしやったが)、人に似ぬ(女君は人と違う)心ざまの(片意地が)、なほ(いつまでも)消えず立ち上れりける、とねたく(妬ましく)、かかるにつけてこそ(またそれだけに)心もとまれと(心惹かれるとも)、かつは(一方では)思しながら、めざましく(それでもどうにも)つらければ、さばれ(勝手にしろ)と思せども、さも思し果つまじく(そうも諦めきれず、小君に)、

「隠れたらむ所に、なほ率て行け」とのたまへど(と宣えど、小君は)、

「いと(とても)むつかしげに(むさ苦しい所に)さし籠められて(閉じ籠っていて)、人あまた(供も大勢)はべるめれば(控えて居りますので)、かしこげに(恐れ多くて)」

と聞こゆ(と申し上げた)。いとほしと思へり(小君は源氏に姉の態度を相済まなく思った)。

「よし、あこだに(では、おまえだけは)、な捨てそ(私を見捨てるなよ)」

とのたまひて(と源氏は仰って、小君を)、御かたはらに(御隣に)臥せたまへり(横に寝かし為された)。小君は源氏の若くなつかしき御ありさまを(活気ある美しい姿を間近に見て)、うれしくめでたしと思ひたれば(素晴らしいと心酔していたので)、そのように素直に喜ぶ小君を源氏

はつれなき人(女君)よりは、なかなか(よほど)あはれに(可愛いと)思さるとぞ(思われた、そう
で御座います)。

(2009年1月18日、読了)